



編集長(ダン シロウ)

■月並みな言い草だが、本当に時の経つのが早い。世の中はもう6月、初夏だ。マガジンは17号で五年目を迎えた。

私の友人達の多くが定年退職も、再雇用も終えた年金生活者になっている。彼らからは、「お前は元気やなあ」とあきれられていたりする。4人いる孫の一番上が小学校に入学し、自分はいよいよ70歳に向けてカウントダウンに突入した感覚がある。

しかし一方、連載で20年前のことや、10年前のことを書きながら恐縮だが、実は今が一番面白い。この世の興味深いメカニズムを見て取る力が自分の中に蓄積されてきたのだろう(相当に奥手ではあるが)。

毎年、面白いものや人との遭遇が増える。けって沢山の人に出会いたいわけではない。名刺交換のようなことはずっと前に、一方的に止めてしまった(貰うだけ)。

新しい物事ではなく、既にあるものの中にある未知だったものが面白いのだ。こういうワクワク感を67歳になって感じられるとは思ってもいなかったのが日々が楽しい。

癌で余命宣告された人が、少し落ち着いてから書かれたものなどに登場する感覚。日々の小さな変化、季節の気配や風の匂いにも反応する自分。そんな感覚が少し分かる。

余命宣告などされなくても、カウントダウンは昔から始まっていたのだ。その事に無頓着でいられた若さの時代から、どことなく日々感じる時期にはいった。残された時間に追い立てられるのではなく、自分の意志で今の時間を充実できている。それを有り難いと思って、今の仕事に取り組もう。

▲16号でひとまず連載が区切りのついた岡田隆介さん、脇野千恵さん、ありがとうございました。また新たなアングルからの再開を期待しています。尾上明代さんは今回休載です。

三野宏治さんから、過去の原稿の記述の中に間違いがあったと報告があった件については、今号にその事を明示し、既発表のモノの修正をどう扱うかは、協議の上で決定したいと思います。

編集員(チバ アキオ)

「千葉さん」に会うと話しかけることにしている。京都で暮らしていると「千葉さん」にはなかなか会わない。電話帳でも数えられるくらいの件数だった。母校のR大でも千葉さんに会った。結婚して千葉さんになったそう。よく訪問先に持っていく和菓子を購入するお店でも千葉さんに会った。この方も結婚して千葉さんになったそう。相手の方の地元は千葉県だそう。職場の行事で訪れたホテル。その従業員の方も千葉さんだった。サッカー好きの千葉さんだった。ルーツは知らないらしい。千葉という名字は千葉県のあたりがやはりルーツと言われ、そこから北上し東北に広がった。関西に住む千葉さんは珍しい。そして、秋田から関西に来た「千葉さん」には会うことはなかった。

私が京都に住み、「千葉さん」と会うたびに話しかけるのには理由がある。私の出身は秋田県である。その秋田県から京都に来た親族がいるからだ。時代はおそらく大正時代。婚姻届は京都で出している。なぜ、その人が秋田から京都に来たのかはいまだにわからない。単純に秋田から京都まで移動するだけでも大変であったことは容易に想像がつく。その人がいたという住所に行ったこともあったが約100年前のはなし。もちろん親戚の「千葉さん」の末裔には会えなかった。

100年後の今はネット社会。その京都にきた親戚の子どもといわれている名前をインターネットで検索してみた。よく考えると下の名前が珍しい。もしかすると…と思ったからである。するとある自治体の広報誌がヒットする。その地域で亡くなった方が掲載される「お悔み」のコーナーに名前があった。「お悔やみ」だけに享年も載っている。

私がきいていた生年月日から逆算するとピタリと一致。その自治体も婚姻相手の方にゆかりのある地域だ。

京都には他にも複数親戚にあたる千葉さんがいたのは事実のようだ。住んでいた場所として宮川町、壬生、南禅寺、仁王門…地名は聞いている。これからも京都にいる千葉さんと出会うと話しかけるだろう。100年後、京都に住む私。「千葉家」としては秋田から京都に来たのは2回目というわけだ。100年前の秋田の内陸地から京都にきた理由は不明。どんな理由かは皆目見当がつかない。

編集員(オオタニタカシ)

連載8回目、編集員になってちょうど2年が経過しました。日々の仕事と3ヵ月ごとにやってくるマガジンの締切に、相変わらず余裕なく過ごしていますが、最近になって時々、思わぬ人からマガジンの連載を見たと言われる機会が出てきました。定期的と一緒に仕事をする人だったり、数回しかお会いしたことのない人だったり、中には学生時代にお世話になった同じ職域の大先輩が見ておられたりして、嬉しい気持ちが半分と、思わず腰が引けそうになる怖さを半分感じます。Facebookのように、オープンな場に何かを投げ、それにアクションが返ってくる経験は、そう珍しくはなくなりました。しかし、マガジンはそれとはまた違う緊張感があります。誰がいつ見ているか、どのように感じているか。「いいね！」とわかりやすくアクションは示されたりはしませんし、数も表示されません。それだけに、自分のことばとして悔いのないものを置いておく必要があるのだと改めて感じました。そして、こんな風に社会に対してオープンに自分の意見を表明をしておけることが、マガジンという場の持つ力なのだと思います。

■ご意見・ご感想■

マガジンに対するご意見ご感想は
danufufu@osk.3web.ne.jp

マガジン編集部

604-0933 京都市中京区山本町438
ランプラス二条御幸町402 仕事場D・A・N

対人援助学マガジン

通巻17号第五巻 第一号

2014年6月15日発行

<http://humanservices.jp/>

第十七号は2014年9月15日
発刊の予定です。

原稿締切2014年8月25日！

常に、新規連載者を募っています。
編集部まで執筆企画を
お知らせ下さい。

対人援助学会事務局

〒603-5877 京都市北区等持院北町56-1
立命館大学大学院応用人間科学研究科内
TEL:075-465-8375 FAX:075-465-8364

対人援助学会事務担当

入会・退会・変更届

〒540-0021 大阪市中央区大手通2-4-1
リファレンス内
TEL/FAX 学会専用:06-6910-0103

表紙の言葉

この表紙のイラストには特に言葉も何もない。落書きの自画像もどきである。漫画の登場人物の一人に自分を描くことは多い。若い頃の自分は髪を黒く、長目に描く。最近の自分はオールバック風にデコの出ている絵だ。どう描いたところで、何かになるわけじゃなし、結局は好き嫌いしかない。

2014/6/10